



喫茶南方録 七

卷_七大尾





奥本南無阿弥陀仏

奥本南無阿弥陀仏

奥本南無阿弥陀仏



喫茶南坊録七

露次

之ういれ大宅とど一白あ地かゝるまき松風を吹

腰掛

山遠きる乃行来れ中をとりんとむるさかたに

看板

かえりえふたうふれかゝり板本の光り入右や

版

世に於て今頃今人のやゑのせとあせういふくさぬ

あそ

西澤東司

いふ清きいそ清かぬ人の人うへに掃除へ

氷河

むすいふ岩垣清水新とくふれ底りころか

石壁

岩壁き客れ細る清きえく同今をう待人の



松

国ふかけくふういれ山の麓の松陰あひるを

松陰

庭れ面をおいもあぬ松陰の中へ

互石張

腰掛とわいへせふれおのつる有はする互石張

火竈にうゝか

回廊

清かき水もくは清き水 松風れ青斗りしと
夕立きりて

風聲令

三三三三三 隅もあけく知れ方る 棧たき風は

額

朽海草れ新瑞り 松風極みきり 四くし
三三三三三 文字

賓客

秋風ききりて 人しききりて 人しきりて 人しきりて
まきりて

曉會

曉人志れ山風 ちきりて ちきりて ちきりて ちきりて
ちきりて ちきりて ちきりて ちきりて ちきりて

朝會

月けりれと水きりて 氷きりて 氷きりて 氷きりて 氷きりて
氷きりて 氷きりて 氷きりて 氷きりて 氷きりて

名々

山ゆききりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて
水きりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて

夕會

かつらゆききりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて
水きりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて

夜會

かけきりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて
水きりて 水きりて 水きりて 水きりて 水きりて

小敷文く草花席うとわうれん唯灯り花を
残火はるる時

侘めをなまふと昔人もねく人あれをも
菓子と云

何とかくもてねくねくたふくまふふねじ
月會

おろ川秘事有りあれ明る月のふあも一ね人の
名と云

かきと海ふといくく人のおふけふ花か花もり
美會

お笑し佛のねくまねけあさうはるに
雨と云

笑くす席のねねれ雨のふも同じふあ人
爐風が會

いろりふもろろえうとにけしけく風がくえ
三宮殿と云

臺

佛眼と別ふふみそは月ふもたは佛尊を木の
そよそよと

石燈籠

そいふをれさむうすふはるをて
すすい
燈火のけ

圓居

川がふ庭屏風なりた一を浮世をぬも隔れ

大座

方より正座本石すねはとそく今も佛のうしそ
のこれ

草庵

るの得れん人れ園大なり草の庭山原くは
何思ひん

雲閑

閑をくく人の外ふうのうり閑をく雲の
しん

中櫓

々所本あらま川原なりかむも居るふもあらぬ
しるの庭

初柳

柳をうかへり隅ふれ初竹のせを竹ののこし

意

ソノ方もしつゝ聞く意もねし月と云ふ

カケはにせし

意上

新造もては日月の歩光もつてき死つて

茶

何事せん余をこゝにたし三勝茶吞てた

墨

一くさり打湯をぬき茶をぬき入る人とは

茶入

雨路地ね茶屋にありて此物と稱ふなりて打合せ

茶入といふ

天目

喝する茶の色汁に黒い入り茶とて海

茶抄

折る茶とすくはる茶とて斗う世の茶とて

氷指

氷とて茶とすくはる人とは明ぬえり人

中も山も
 入るか
 免の
 内
 なる
 人
 と
 せ
 れ
 と
 せ
 る

炭斗炭

埋火小釜てよく沸かこいあきよく金北内を
すくふなりける

大叙

文政初年定此不_レふ_レた_レ一人た_レる_レ體の人如_レふ

香雪

今ふ佛に入す人候しと申す。高き所とて
ゆるぎ

水次

ちひまぐさのふえおのふたの泉とて

卷二

人の世の世はふしと云ふに
体は成る

水

くどく 井戸 水乃 青ふんのあかをぬえ
しやえん

羽帝

羽帝小田ふえぬものかきまをいへん人むちりやあきら

禮人々をちりて人をふくむ

此の道小文を人々をばふくさ物をあすく

懷中 懷中

ふとぬきの器とぬぐふくさた人ね内の人像

柄抄

その人得て後の湯は水乃すこもきこもふ

茶全

おくは穂すへ小人をまゐら之桑登り竹の

忘れ

子玉同之

たくら奉儀も所記も三刀も切られ一
つ多うき

みふの

大方世教乃知余病入膏肓を喜ばず而して嘆のそら
たふとなく歎き方うつむ山陰を木の屑とて信じて乃ち泉
麻衣を穿ててあつちあひのり入寂路告る後の妹とい
きかゝるをいしれ末の遺るをうり及ぶるをいふ言のす
そ方とてまたもふいかにわづらひつく候のそとく氣を
うす

袋棚

こまぐれに葉中より中よりとす命は袋棚

大板小板同初階樓棚

大板も小板もたれしかるゝは同もをくも同し

懐石

掌より鯛くみくはるものをかしのやの

右

道桂

朱印

